聖書の教えによる

「安息日について」

１９８７年２月１日

小池辰雄

聖書の伝えている天地創造の神話によると、天地晦冥、地水混沌、四囲朦朧としていたが、神の霊が大海の上を覆っていた。そこに神が、

「光あれ！」

との霊言を発したら闇の中に光が生じた。神はその光を観て、

「い哉！」

と神は叫んだ。これはヘブライ語で「トーブ」ですが、現行訳では「善し」とか「よし」とか書いてあるが、これは感心できない。善悪、良否ではなく、「ああ美しい」「ああいなぁ」といった善悪の彼岸の世界なのです。

「夕あり、朝ありき。是れの日なり」

とある。ユダヤ人は一日を日没から次の日没までとします。

二日目には大空が創造された。三日目には植物が創造された。四日目には太陽や月や星が創造された。五日目には魚類、鳥類が創造された。六日目には昆虫類、獣類が創造されたが、最後に神のに即して人が、男と女に創造された。即ち人間の創造をもって創造のが一応終ったので、神は七日目に安息した。そしてこの安息日を祝して聖別し給うた、とある。即ち神は六日間、創造の業を進めて、七日目に安息してこの日を神聖な日として聖別し、ひとは、被創造物、とりわけ神のに即して創造された人間が、美しい大地をとし、美しい天空を天井として、神の聖なる霊気の中に安息するのが、安息日の意義なのである。六日間の労働と七日目の安息は、神の創造の秩序で、特に人間は神の中に安息すること、それが霊的な神の無相の相に即してられた人間らしさである。

この神話は、そのような畏るべき真理、神の啓示の真理を表わしている。人は正に（神霊の止どまっている存在、前講の如く）であるから、是非とも安息日は宗教的な暮らし方をなすべきである。神仏を信じない人と雖も大自然を相手とするとか、古典に親しむとか、とにかく仕事は休んで心の世界をゆたかにする生き方をするべきである。

社会の制度としても一切の行事を営まぬように確然と定めるべきである。日本人は働きすぎるというのも、安息日を今述べたような暮らし方をしないからである。それは実は自然の秩序にも反するので、精神的にも、肉体的にも却ってマイナスである。

私の経験体験を述べさせていただこう。私は学生時代、翌日に試験があろうとも安息日（日曜）は勉強しなかった。週日にがんばった。

キリスト教の安息日は、十字架の金曜から数えて三日目の晨、イエスは復活体（これは霊化された体である）として現われたので、キリストの復活の生命にあずかる日としてキリストに祈り入る礼拝を行ずるわけである。これは次の六日間の原動力となる。私は１９４０年から自宅の一角を会堂にして聖書の講筵を開いているが、天界からのキリストの聖霊の力にあずかるので大変ありがたいのである。参集者も嬉々として聖霊の光と愛に浴する。聖書はそういう生きた文字で、キリストが、

「わがは霊なりなり」

と語っている通りである。肉体は大自然の恩澤に浴し、霊魂は神の霊的な生命によって生命づけられる。これが私が体験せしめられている安息日なのである。

【附記】当分聖書に関連したことを書かせていただきましょう。読者は是非他山の石として下さい。〔『日本……』新聞の７面のコラムに掲載〕